44名（約3%）、内訳は老年病科13名、救命救急科9名、循環器内科4名等、経過を見て判断するは84名（約5%）、内訳は救命救急科21名、老年病科と循環器内科の各11名等であった。検討課題は、ADL低下25名、認知症等23名、予後不良13名、要医療的ケアー10名等である。

【考察】 退院支援の必要性ありと経過を見て判断の合計は128名（8%）で、その他92%の患者は支援不要と判定された。又65歳以上が1番多い眼科では退院支援の必要性は殆どなく、診療科の特性がみられた。退院支援の必要性が高いと思われた救命救急科、老年病科、循環器内科では重症度の高い緊急入院が多く、また患者の高齢化や核家族化など家庭的要因が重要な問題となる。今後は調査結果を参考にスクリーニングや退院支援の方法を検討し、支援業務の改善・効率化を図りたい。又、以前からシート使用実績のあった部署は記載内容や判断の質は高く、今後は病院全体でシートを使用する事で退院支援力の向上に繋げたいと考える。

P3-63.

学生インストラクターによる医学部1年生へのCPR+AEDプロバイダーコース

（東京医科大学　医学部医学科第6学年）
山口　隆志
（東京医科大学病院　救命救急センター）
米倉　克彦、佐伯　悦彦
（看護部）
川原千香子
（救急医学）
三島　史朗、太田　祥一

【背景・目的】 平成21年度より医学部1年生全員を対象に東京医科大学病院CPR+AEDプロバイダーコースfor Students（以下講習）を行っている。今回、2年目を迎えた学生インストラクターによる講習の効果と課題を検討した。

【対象・方法】 平成22年度入学の医学部1年生93名の講習の評価（実技および筆記試験）と受講後アンケートを前年度と比較した。また、インストラクター希望者とその動向を調査し、その1年生が指導に参加した東医祭で受講した一般市民6名へのアンケートを検討した。

【結果】 実技試験、筆記試験ともに評価は前年度と変わらなかった。また、アンケート結果ではインストラクター希望が53人（57%）と増加した。うち14名（15%）がメンバーに加わり、11名（12%）が実際のインストラクターコースを受講した。メンバーの14名のうち6名がプレインストラクターとして東医祭で実際に指導した。一般市民のアンケートではほとんどができると回答した。

【考察】 2年継続して学生が行った講習は質が維持されており、インストラクター希望者が増えたことは、我々の活動の意向がより伝わったためと推察された。さらに、一般市民への指導においても、院内行っているものと同じ手順を踏めば、受講後1年以内に医学部1年生が指導でき、今後の普及に貢献できる可能性が示唆された。

P3-64.

本院における小児熱傷症例の傾向と啓蒙

（社会人大学院1年形成外科学）
○坂本奈津紀
（形成外科学）
小野紗耶香、今井龍太郎、松村　一
渡辺　克益

小児熱傷は、小児の外傷のなかでも頻度が高いものである。そしてその受傷状況は知的発育・運動能力・生活環境に大きく影響されている。

今回は0歳から12歳までの小児熱傷を対象とし受傷年齢・受傷部位・受傷機転等について、これまでの報告との比較検討を行った。今回の調査では、受傷原因が以前のものと比べ多様化し、その多くが日常生活用品によるものであることがわかった。これより、対象症例となった小児が核家族化した中で生活し、その行動範囲自体も狭くなっていると推察される。また、受傷時間も夕方から夜間が最も多く、小児の生活時間も変化していると考えられた。

そして新宿という土地柄、自宅外の受傷原因としてホテルなどのルームランプがあげられた。これは小児の身長・手の届く範囲と熱源となるものの高さ等が関連しており、前もって保護者が典型的な受傷パターンを知っていれば、未然に防ぐことが出来ると考える。そのためわれわれは外来等で呼びかけを行う以外に、実際に近隣のホテルに注意を呼びかけ